

M e t a l B r e a k e r

山田太郎＝焼肉 NT

人類と心なき侵略者の戦争が始まり、早数十年が経とうとしていた。

人類の大半は地球の未来を見出せず太陽系外に逃走、残された人類はシェルターを建設

反抗を続けるも大陸の7割を喪失していた。

これは日本最後のシェルター、神戸シェルターで少女、夢未無荘の運命に抗う物語である。

目次

羽化	1
第1章「イレギュラー」	11
非普遍的日常	11
普遍的非日常（1）	21
普遍的非日常（2）	35
普遍的非日常（3）	52
行くぞ我ら独立遊撃小隊プロトン（1）	77

羽化

ある者は、大きなことを成し遂げるために力を与えて欲しいと神に求めたのに、謙虚さを学ぶようにと弱さを授かった。

ある者は、より偉大なことができるようにと健康を求めたのに、より良きことができるようにと病弱な体を与えられた。

ある者は、幸せになろうとして富を求めたのに、賢明であるようにと貧困を授かった。

ある者は、世の人々の称賛を得ようとして権力を求めたのに、得意にならないようにと失敗を授かった。

求められたものは何一つとして与えられなかった。

周りからは火薬の臭い、肉の腐った臭いが漂っている、この臭いを嫌と言うほど

知っている。

吐きたくなるようなナニかが焼ける臭いが漂っている中、周りにいる人間、いや化け物^{にんげん}は異形の武器を掲げ辺り一帯を火の海：「地獄」に変えながら凶器を振り上げる。

仲間が化け物に食われていてもその仲間もろとも殺す。

脚を千切り、臓腑を引きずり出し、武器が無くなれば己の拳、脚で。

仲間がまた一人、二人、三人目と死んでいる中で一人の女は笑っていた、こんな世界を笑っているのか、それともそれは自身に向けてか。

「アハハ・・・、死んだ・・・また死んだ。いままで何人死んだの、アハハ・・・。」
今に目を向けたくないためか、女は首筋にアンプルを突き刺した。

そしてこの女の周りにも化け物が集まってきていた

「私のお迎えはあなた？ 残念ね、あなたじゃ私のお迎えには足りないわ。」

次の瞬間、化け物はスクラップへと成り果てていた、化け物をズタズタにした人物を女は知っていた

「遅かったね〇〇〇。その辺でおっ死んじまってるかと思ったわよ？ って痛い痛

い!!死骸の脚で叩かないで!」

「早く武器を持て、そして立て、こちらの部隊は壊滅した、ここで生き残ったのは俺たちだけだ。」

女は武器を持ち、安全装置を解除し、目だけを男の方に向け、姿を確認する

「だったらたら逃げていい?」

と半分冗談で男に聞くが、男は女の方を向かずに、こちらに向かってくる化け物を目で追っていた

「逃げたら殺す、死んだらもう一回殺す」

「うわ、容赦な、冗談なのにどうして?」

「冗談いつている暇があったら一匹でも多く倒せ」

「ヘーイ」

しかしながら二人で殲滅ほど敵も甘くは無い

女は右手に機関銃とショットガンを合わせた様な武器を持ち、軽々と数メートル跳躍、蟻ありに似た化け物の頭上から鉛の雨を降らせる。

化け物を倒すと左手に持ったビームランチャーで直線状に並んでいた3体をま

とめて吹き飛ばした。

「だぁもお！多い！」

女は武器の弾切れに気付कि、予備弾薬ベルトを探しつつ、男の方へ眼だけに向け
た

「十時方向を片付ける、それなら他の部隊と合流できるやもしれん。」

男は剣のような武器を鞭のように変化させ一帯を薙ぎ払う

「残りの弾薬が心もとないからこっち手伝ッ、がはっ！」

地中からいきなり出現した化け物、大きさは全長50m位だろうか。鮫さめに四本の
脚を付け、背中に空母の甲板を無理矢理合わせたような化け物に弾き飛ばされてお
り、女は倒れている

「(空母型か、不味いな・・・)」

この化け物は空母型と呼称されているが、空母の様に艦載機を発艦するのではな
く、空間を歪め、A地点とB地点繋げて他の化け物と呼び出すというもので、

男はすぐさま攻撃を仕掛けたが、すでに時遅く、空間が歪み、黒い穴が開いてい
た。

「(まだ、本体を倒せば)・・・!？」

本来であれば小型種がゴキブリのように出て来るはずだが、そこから出てきたのは

「オリジン!？」

出てきたのは、この世界を阿鼻叫喚地獄に変えた化け物のうちの一体、円柱状の掘削機のような右腕、左腕には岩盤溶解に使われるレーザートーチのようなものを装備しており、足が戦車の履帯のようになっていた

出現と同時に背中ハリネズミの針を全てミサイルに変えたような器官を赤く発光させ、ミサイルをばら撒き、一瞬にして辺り一面を火の海に変えた。

「くっ・・・」

男は近くにあった中型を盾として利用し難を逃れたが、ミサイルに巻き込まれたであろう女の姿が見えない、そんな中化け物の背中から新しい針が生えてきており、予想よりも速い第二射に男は焦っていた。

瞬間、男の視界は

極彩色に染まった

君は、こんな所でくたばるにはまだ早い人間だったようだな。

男は薄暗くジメジメとした空間で目覚めた、起き上がろうとしたが右腕と左脚の感覚が無いことに気づいた。

「ゲホッ・・・ガッ・・・」

横にいた所々に血の付いた医療用のエプロンを付けた男に声を掛けようとしたが、男の喉から出てくるのは声ではなく、咳と赤黒く変色し固形化した血だけであつた。

「無理もない、あの戦場での長時間戦闘だ、喉が焼けてしまったんだろう。ああそうそう、右手左足は腐る前に僕の判断で切断した。」

「戦況は・・・？」

エプロンをゴミ袋に入れた男はタブレット端末を渡してきた。あるニュースサイトに掲載された記事にはこう書かれた。

トウキョウ戦線崩壊

隣国によるトウキョウに向けて無警告による二発の反応兵器使用

防衛ラインの崩壊により、戦力をシズオカからナゴヤまで後退

首都であるキョウトの首都機能をコウベに移行

九州にて海外から受け入れていた難民の一部が暴徒化、民間人と軍との三つ巴状態に

これにより国民の国に対する不満感は一層増した

「中々に酷いものだろう？ 君はあの日から一か月昏睡していた、そしてトウキョウ戦線で生き残ることができた唯一の人間だ。」

男はポケットから一本の試験管を取り出した、中には人間の脊椎骨格のようなものが入っていた

「君にはこれから、僕の代わりにトウキョウまで行ってもらおう。」

男が壁を叩くと、「ガコン」という音とともに、叩かれた壁からナニかつるりとした鎧のようなものが出てきた。

「反論は一切聞く気はない、これから君は僕の手足として馬車馬のように働いてもらうし、その外殻は死してなお君を地獄へといざなうだろうが。」

「・・・かまわん、地獄、は、すでに、味わっている」

男は渡された試験管の中身を飲み込むと、銀色の糸のようなものが無くなっていた右腕と左脚の断面から伸びて新しい右腕と左脚を構成し始めていた。

「それはコマンド・・・あああの化け物どもの名前ね、あいつらのコアを加工して作られたものだ、使用者自身の体を半分コマンドと同じように変えてしまいが、君はそれと同じことを以前行っているだろう？」

新しく構成された腕と脚はよく馴染む、体毛が抜け、視界からは色と形が失われ、意識を保てなくなり、心臓の音は静かになっていく

「おや、もはや人の形を保てなくなってきたか。やっぱりコレを用意してよかった。」

もはや男には目の前の人物がなにを言っているのかがわからなくなってきていた。

「・・・はあ、今回の君にはそれなりに期待していたが、所詮は適格者^{レギュラー}だったか。まあ、それでも僕のために利用させてもらうよ、飼^{ハウンド}い犬最後の生き残りである嵐山ヒロクン」

妄執は未だ付きまとう、決められたルールを外れ、新しいルールを敷くために、それは呪いか祝福か、あるいは祈りか。

第1章「イレギュラー」

非普遍的日常

下の挿絵は知り合いに描かせたものです。ありがたい

私は目の前にいる銀色の集団を見据えて走り出していた。いったい何のために私はここにいるのだろうか、そんな考えはとっくの昔に忘れた。

ただ今は、手に持った獲物を振るうだけ。

「ツイントマホオオオオオク！ブウウメラアアアン！」

連結した二本のハルバードを銀色の集団に向けて勢い良く投擲する。ツイントマホークブーメランと言ったのはいいが、そもそもトマホークじゃなくてハルバード



だし、ブーメランなのに戻って来ないことには目を瞑るしかない。

投擲したハルバードは面白いように銀色の集団をズタズタに切り裂いていく、しかし投擲したハルバードは手元に戻ってくることはない。

私は目の前にホログラムディスプレイを表示する。画面には武器などの残弾数やパワードスーツの状態が表示されている。

「(損傷は軽微、でもまともな武器が単分子短刀と……これだけか。いったん下がった方がいいかもね。)」

私はすると突然空から人が落ちてきた。

「ぶべえっ!」

カエルが潰れたときのような声が聞こえたが、多分大丈夫だろう。

「あー、生きてるー?……生きてるならここ200秒持たせて、補給が済んだら撤退の支援ぐらいはできるかも」

オートバランサーの機能で無理やり立ち上がったようだが、肝心の人間は顔を青ざめ、手足をプルプルと震わせていた。しかし、出撃前にあれだけ騒いでたあいつなら大丈夫だと信じて私はこの場を離れることにした。

「変な夢だった・・・」

私の名前は夢未夢荘^{ゆめみむそう}、既視感を感じる羽切の悪い夢であった、続きが気になるのもう一度寝ることにする。がしかし、そう上手くいかないのが人生である。

朝から鳴り響く目覚ましのアラーム音、実はこれ3回目である。布団から手だけを伸ばし、携帯を手取る。

手にした携帯には7時46分と示されていた

「んあ・・・やばあ、寝過^ぐした・・・やっべどうしよ・・・」

「(休みたいけどなあ、)」

そんなこと考えながらうつかり生卵を電子レンジに入れ、爆散

生卵は命名しがたきもののへとクラスチェンジを果たした

「・・・・・・Oh」

そして私はなけなしのお金でパン買い、ついでに学校へと向かった。

「あーあ、誰だよコンビニに火炎瓶投げ込んできたやつ・・・、不味い、やっぱ合成食品はおいしくないなあ。」

まさか街の外からの武装した集団が無差別に街を襲撃するとは思ってなかった。まあ、私の敵じゃないんですけどね。襲ってきたお前たちが悪い。

学校についたのはいいが、件くだんの武装集団に絡まれたことを報告したら遅刻は許された、サンキュー暴徒共

しかし私のいない間に返却されたテストの結果が目を開きたくなくなるようなものだったのでババアからのラブお呼び出しコールで職員室へ、ペッ！

「夢末さん、貴方また赤点ですよ、いくらこの学校が防衛軍への近道だとしてもこの成績だと将来自分の首を絞めることになりますよ？」

「じゃあもっと分かりやすく授業で解説してくださいよ、私のおつむじゃわからないので。」

「ハァ・・・」

「はいはいわかりましたよ、次のテストからは頑張ります」

更年期ババアのありがたいお言葉お説教から解放された私は、ストレス解消がてらに何か食べようと鮑を漁るが

「あっ、しまったお昼・・・」

件の暴徒共のせいで何も買えなかったことを思い出した、いずれ豚箱から二度とお天道様を見上げられないようにしてやる。

私は空腹を抱えながら考えた。考えて考えて一つの答えを導き出した、

「そうだお昼ご飯を誰かから恵んで貰おう」

しかしながら現実是非常に残酷である、皆口をそろえて「ごめん今日はちょっと」

「くっそおお・・・いや、まだ、まだあの二人なら」

やむなし、二人がいると思われる場所へ私は向かった、

そして私は二人の男子学生の前で土下座をした、潔く、醜く、そして見た者全てが感動すら覚えるであろう綺麗なフォームで

「土下座とはな・・・金持ちのボンボンだったであろう者が、底辺にいる私たちに
いったい何の用で」

貴族のボンボンじゃなくって悪かったな

「おいヒロト、その言い方はどうかと思うが・・・」

話しかけたのはヒビキ・タナカ、カラテをやっていたが反則ばかりを取っていたので大会から出禁を食らったらしい、あと純日本人らしいけど名前は気にしてはいけない。

そうだが、権力はなくなったけど、今は腕力で貴様を屈服させるぐらいはできるんだぞ？

「ジョーク、ジョークだよそこまで気にするなかれ。」

左手にはタブレット端末を持ち、右手でホワイトボードにマーカーで何かを書いている男子学生は山先弘人、やまさきひろと数年前からよくつるんでおり、本人は否定してはいるが、厄介ごとに巻き込まれやすい体質で、その被害を毎回ヒビキが受けている。

「そんなことよりも、何か、お昼ご飯を恵んで下さい・・・」

「そういやさ、他人に飯を求めるロイヤリティ様や」

ロイヤリティってなんだよ

「さっき聞いたがお主現代史テストで赤点じゃったろ？今からそのホワイトボードに主要な部分を書いて行くから覚えなされ」

「それ以上口を動かせば黄金の右手が貴殿の顔面をぶち抜くぞ？」

喋ればいつもこれである、さすがに今回の私は私が悪い気がするが、そろそろマジでぶん殴ってもいい気がする。

「夢荘」

ヒビキが私の肩を叩いてきたので、そちらを向くと、ヒビキがポケットからステック状の何かを取り出した。

「食べてみな、飛ぶぜ」

ヒビキが夢荘に手渡した物のパッケージに書かれている商品名が「糖分チャージ YOU^{かん}勘」である。クソみてーなネーミングセンスとヒビキの表情にとっても腹が立つ

「なにこれ？ふざけてるの？」

「これは良い物だ、食べたらず頭が冴えてくるんだ」・・・あー、まさか知り合いが

法を犯すとは・・・」待て待て待て、別にアブナイ白い粉とかじゃないんだよ、いや砂糖は中毒性が高いけど、けどね、僕だって適度に摂取しているんだよ！・・・一日に数本^{ナンバード}」

・・・だめだ、お腹空きすぎてイライラしてきた

「何でもいいから、最悪賞味期限ちよっとすぎてるパンでもいいから、なんかくれ」「ちよっと賞味期限切れてるけど、0ーソンのメロンパンでいいか？」

「それでいい、とりあえず満腹感を得られれば。」

「夢荘・・・お前金持ちのボンボンなのに・・・それでいいのかよ・・・」

弘人はカバンの中からレジ袋を取り出し、私に投げつけた

「金持ちのボンボンだったのは昔の話ですよーだ」

レジ袋からメロンパンを取り出すが・・・

「「あっ、」」

が、しかしそのメロンパンは無惨にもペチャンコに潰れていた

「「・・・・・・・・」」

私は言葉を失った、フォローのためか、ヒビキの悪意はないが無慈悲かつ無意識

な口撃を放つ

「だ、ダイジョーブだろ、こんなの夢荘の胸見たいに潰れているだ……」

次の瞬間、私の中で何かのスイッチが入る音が聞こえた。

「おっと、ワッチは逃げまつせ……」

弘人は何やら後ずさりをしているようだが

「けっ・ ・ ・ ・ ・だかッ・ ・ ・ ・ ・ら」

ヒビキの顔が茄子のような色に変色していく

「死に晒セツ！糞野郎！」

気づけば私は、ヒビキの首を絞めていた。

普遍的非日常（1）

ヒビキの顔が茄子のように変わっていく、ジタバタと暴れていたヒビキの手足が徐々に勢いがなくなっていく。

「夢荘、これ以上はさすがにまずい。いったん落ち着いて深呼吸をしろ、ほらひっひっふーひっひっふー」

さすがにまずいと感じたのか、弘人がヒビキから私を引きはがした。

「すうううう、はあああああ」

ヒビキに

「ゲホッ、ゴホッ、僕を亡き者にするつもりなのかこのB70は……あっやべ」

「あっ！おいこの馬鹿それを言ったら！」

「は？」

私は掃除用具入れから取り出した箒をヒビキに向けながら、ゆっくりと、ゆっくり

りと確実に近づいてゆく。その姿はヒビキにはどのように見えているのだろうか。

「待って待って、今のは言葉の誤りと言いますかね」

私は瞬きの刹那にヒビキの視界外に移動し、箒を振り下ろす。

「しいいねええええいしいいー！」

ヒビキはその一撃を鞆の中から取り出した30cmの定規で受け流した、しかし私は待っていましたと言わんばかりにもう一つの小さい箒をノーモーションで投げつけた、がそれすらもヒビキは受け流した。

「搦め手は予想済み、僕に二撃目は当たら……な、い」

ヒビキはどうやら袖に違和感を感じたらしい。服の袖を確認すると、定規ごと服の袖が切り裂かれていた。

「二撃目が、なんだって？」

「もうやめよう、僕たちが争う理由なんてないだろ？」

しかし私は当たり前だと言わんばかりに理由を喋る

「私を馬鹿にした、それ以外に理由、ある？」

「いや、さっきのは誤解と言うか……うっかり口がすべたと言いますか……」

ヒロト！ヘルプ！」

どうやらヒビキは弘人に助けを求めているようだ、がしかし残念だったな、あやつはこういう時は大体

「服の袖は後で縫っておくから安心して逝ってこい、ヒビキ」

自分に被害の及ばない離れた位置で傍観しているやつなのだよ。

弘人は教室のドアを開け、離れた安全圏から手を振っていた

「待って、ねえ待って！せめて間に入って止めるぐらいは」

「死んで詫びろっ！ヒビキ！」

私は箒を振り上げる、当てる気はない、むしろくしゃするが後で何かおこってもらえばいい。そう思いながら振り上げた箒を下ろそうとするが、突然足元が崩れるような感覚に襲われる。

「うつ……おえっ……げえ」

それは最悪の寝起きだった、名前を知らない誰かと親しく喋っている誰か。

それを思い出そうとすると頭が痛み、猛烈な吐き気と喉の渇きに襲われる。

そんなことを数十回と繰り返しているうちに、何を思い出そうとしていたのか忘れていく。

「(･･････今日は、何するんだったっけ ？)」

今日は確か防衛学校の入学式だったかな？揺れる視界と手足に無理矢理活を入れたトイレから這い出る。

正直この体調なら連絡すれば休めるだろうか？印象は悪くなりそうだが、そんなことを思いつつも真新しい制服を取り出しながら朝のニュースに耳を傾ける。

『続いてのニュースです。本日より住人IDの更新が始まりました。』

「(しまった、今日からIDカードの更新が始まるのか、早めにやらないと忘れそうだな)」

『しかし最近IDカードの更新が頻繁に行われていますねえ』 『よくある話です

よ、ルールを守らない少数のせいで大勢が困ることになるのにそれを理解していないんですよ、外人ってやつは』

街頭インタビューから画面はスタジオに代わっており、キャスターとよく見る胡散臭い専門家がIDカード更新の件について述べていたが、正直それにあまりいい印象を私は持つことができなかった。

いつからだろうか、こんなにも人がおかしくなっていたのは。人類の大半がこれからの地球に未来を見出せず、太陽系外へ逃げ出した時から？それとも残された人類が無意味な抵抗を続けて数十年という時間？多分考えても意味のないものなのだろう。

私は朝食を済ませ、身支度を整え、家を出る。

私の住んでいるのは神戸シェルターの西区にあり、そこから路面電車で10分ほど揺られてようやく到着する。

路面電車は5分に1本の間隔で運行しているため遅刻の心配はないが、それでも早く着くに越したことはない。電車に揺られて数分ほどで目的の停留場に到着した。降りてすぐに学校があるため迷うことはまずないが、念のため地図アプリを開き確認しながら歩くことにした。

10分程度歩いたところで目的地である高校が見えてきた。周りに他の生徒の姿

はなく、恐らく私が一番乗りであろう。私は少し優越感に浸りつつ校門を通り抜けようとした時であった。

「ちよっとちよっと」

不意に声をかけられた、声の主は金髪ロングの女子学生だった。どこかで見たことがあるような気がするのだが、誰なのかわからない。

「あなたも新入生？」

「はい、そうですね」

「ふーん、じゃあ私の方が先に来てたから先輩ね、私の名前は東雲唯、よろしく！」

「私は、夢未無荘といいます、こちらこそ、よろしくお願いします」

「ゆめみむそう？」

聞き慣れない言葉を聞いたせい、彼女は首を傾げるが、特に気にすることなく会話を続ける。

「夢未無荘って言いづらいわよね、なんかニックネームとかあるの？」

「いえ、特段そういうものはありませんが」

「うーん・・・夢未無荘だからムソウちゃん？」

「別に構いませんが」

「決まり！私あんまりネーミングセンス良くないけど、まあ許して頂戴」

「はい」

こうやって話してみると普通の女子高生だなと思いながらも校舎に向かって歩出す。すると東雲さんは横に並んで歩いてくる。

「同じクラスになれるといいんだけど」

「どうでしょう？確率は低いと思いますが」

「でも一応希望は持たせて」

「わかりました」

「それとさっきから敬語だけど堅苦しいしタメ口で構わないわ」

「ではそうさせてもらう」

「うんそれでよし！ちなみに今何歳？」

「16よ」

「同い年じゃない！？なんでそんなに落ち着いてるわけ？」

「落ち着きたくなくても勝手に落ち着くわ、それより貴方の方は何歳ですか？」

「15だよ、誕生日はまだきてないし」

「じゃあ年齢では私の方が先輩ですね、一つだけですけども」

そんな他愛もない話をしている間に教室に到着する。まだ入学式は始まっていないらしく中に入ると既に何人かの生徒がいた。黒板には座席表が貼っており自分の席を確認すると窓際の一番後ろだった。そして隣の男子生徒が話しかけてくる

「おっはよう」

彼はヒビキタナカという名前らしい。髪の毛が逆立っており、まるで鶏のような見た目をしている。

「おはようございます」

「君名前はなんていうんだっけ」

「私は、夢見無荘です」

「珍しい名字だねえ」

「よく言われます」

「僕はヒビキタナカ、ヒビキって呼んでくれたら嬉しいかな、これから仲良くしようぜ」

「ええ、よろしく」

その後担任の教師が来て、体育館へ移動するように促される。私達はその指示に従い移動する。その間、クラスメイト達がチラホラと見え始めた。

「(全員男と女が同じくらいいるみたい、男女比はちょうど半々といったところでしようか)」

そんなことを考えていると、校長先生の話が始まる。長い話に退屈しているといつの間にか入学式が終わっていた。次は生徒会長による祝辞がありそれが終わると各クラスの担任の簡単な紹介がある。私の担任となる人物は男性で名前を山本という。生徒達への連絡を終えると今度は教頭と名乗る女性教師の順番となった。

『みなさん初めまして』という第一声で始まった話は生徒達にはあまり興味を惹かれない内容だったが、私にとっては気になることが幾つかあった。

『現在この神戸シエルターには約250万人の人が生活しています』という一文から始まる話の中でシエルターの人口が年々減少している現状と今後の見通しについて語り出した。

『今後、侵略者の活動がさらに活発になると予想され、神戸シエルターの存続のた

めにもより一層の国防力強化が求められるようになります、そのために我が学園は防衛軍との連携を深めていく所存であり——』その後も長々と話していたが結局何を言いたいのかわからない。しかしそれは他の生徒たちも同じようであまり真剣に聞いていなかったように思える。そんな中、隣にいるヒビキタナカだけは真面目な様子で耳を傾けていたのであった。

「ねえ夢未無荘ちゃん！これから皆で遊びに行かない？」

「すみません、今日はこのあと用事があるのでまたの機会にして下さい」

「あら残念、じゃあしょうがないわね、お疲れ様、また誘わせて頂戴！」

「わかりました、その時は宜しくお願いします」

そう言って東雲さんは自分のグループの元へ帰っていったようだ。

私は荷物をまとめるとそれを抱えて帰路につくことにした。学校を後にするとすぐに停留場に向かう。電車に乗り込むとゆっくりと動き出し、私は家路についた。私は家に帰り着くと早速制服を脱ぎ捨て普段着に着替えると、そのままベッドの上で倒れ込んだ。

「はぁ・・・」思わずため息が出る。

「やっぱりあのどこかで見たことあるんだよねあ」

私は記憶を辿りながら考えるが全く思い出せない。ヒビキタナカは何か知っているかもしれないけれど聞くのも面倒くさいのでやめておくことにする。

「(明日も早いしもう寝よう)」

私は電気を消すと布団の中に潜り込み眠りに就いた。

翌日になりいつものように登校する準備を始める。朝食を済ませると身支度を整え、玄関を出る。

「行ってきたーす」

誰もいない部屋に向かってそう告げる。

通学路の途中にあるバス停に着くとそこには既に数人の生徒が待機していた。

「ムソウちゃん！おはよう」

「東雲さん、おはようございます」

「昨日はごめんなさい、急に引き止めちゃって」

「いえ、気にしないでください」

「ところでムソウちゃんって一人暮らしなんだよね？」

突然そんなことを聞かれたので少し驚いたが冷静さを装う。

彼女は続けて質問を投げかけてきた。

彼女の言う通り私は一人暮らした。訳あって両親と離れて暮らしている。今まで祖父と暮らしていたが、持病で昨年亡くなってしまったのだ。それ以来私は一人暮らしを続けている。

そんな事情を彼女に話すわけにもいかなかったので適当にはぐらかすことにしよう。私が答える前に電車が到着したので会話を中断して乗り込むことにする。

車内に入るとすでに何人かの生徒の姿があった。

「(結構混んでいますね)」

「(うん、ちょっと窮屈かも)」

2人で並んで座れる場所を探していると、ヒビキタナカがこちらにやってきた。

「よっ」

「どうしたんですか？ タナカ君」

「いや、僕も仲間に入れてもらおうと思って」

ヒビキタナカは相変わらず鶏のような見た目をしている。髪の毛が逆立っている

せいか余計鶏っぽく見える。東雲さんは困っているような表情を浮かべていたが、特に嫌そうな素振りを見せなかったので了承することにした。

ヒビキタナカは私の隣の席に座ってきた。彼の髪の毛のせいで私の肩口がちくちく痛むので出来れば別の場所に移動して欲しいのだが、それを口に出すほど野暮ではない。

私達是他愛もない話をしているとあっという間に目的地に着いた。

教室に入り自分の机を確認すると鞆を置く。

しばらく待っているとチャイムが鳴ると担任の教師が入ってきた。教師が入ってくると生徒達は一斉に起立をする。教師が挨拶を終えると、出席確認が始まり、その後は連絡事項の確認が行われた。

「えー、今週からはいよいよ授業が始まる、各自しっかりと勉学に励むように、以上」

教師が出ていくと生徒達はそれぞれの友人の元へ向かう。私は東雲さんのところへ行こうとした時、ふと視線を感じた。

その方向を見ると、一人の男子生徒と目が合った。彼はすぐに目を逸らすと、教

室の外の方へと向かっていった。

私は彼に見覚えがある気がしたが、どこで会ったのか思い出せなかった。

普遍的非日常（2）

その後の授業も滞りなく進み、放課後になった。

「（確か来週には適正検査があったかな）」

私は荷物をまとめて帰宅する準備をしていた。

今日は特に予定も無いので真っ直ぐ家に帰るつもりである。

私は荷物をまとめ終えたと、教室を出て昇降口に足を向けた。

昇降口を抜けると、ちょうど下校しようとしていた人物がいた。あれは確か教室で一瞬目の合った男子生徒だったかのだろうか。彼も私の存在に気付いたようで、脱兎の如き勢いでその場を立ち去ってしまった。

「なんだろう、変な人」

私は首を傾げながらも、そのまま帰路についた。

私は自宅に到着すると制服を脱ぎ捨て、普段着に着替えて一息つく。

「ふう・・・」

私はベッドの上に横になると、天井を見つめながら物思いに耽っていた。

「そういえば、あの人の顔どこかで見たことあったんだよねえ・・・誰だろ」

私は記憶を辿りながら考え込んでいたが、結局思い出せずにいた。

「まあいいか、そのうちわかるでしょう」

私はそう呟くと再び眠りに就いた。その後も大したイベントは起こらず、一週間が過ぎようとしていた。

いつものように登校の準備を始める。朝食を済ませると身支度を整えて玄関を出る。通学路の途中にある停留場に着くとそこには既に数人の生徒が待機していた。

「ムソウちゃん！おはよう」

「おはようございます」

東雲さんに声をかけられると同時に電車が到着したため乗車することができた。乗客が多い時間帯であったため少しの間車内で圧迫されてしまったが、何とか耐えることができたようだ。車内ではいつもの他愛のないことや授業の話をして盛り上がっていたが、突然電車が急停止したことにより会話が途切れてしまった。何事かと思い前方を覗くと黒煙が漂っており、どうやら事故が起きたらしいことが伺えた。「これは酷いな」

他の乗客たちも動揺しているようだった。

安全が確保されないため乗客全員が降ろされることに為ったため、私達も一つ前の停留場に降りることになった。

暫くすると救急車などが到着しており、負傷者が運び出され始めた。

私はそれを傍観していたが、救急隊員に運ばれず、黒い袋のようなものに入れられて行く男性を見た。全身が爛れており、まるで火で炙られた後のような感じだ。私はその光景を見て背筋が凍るのを感じていた。

「また外人のテロだってさ」「こわい」

周囲の声を聞いている限り、あの袋に入れられていた男性は路面電車が止まった原因のテロ、その主導者なのだそうだ。

「外人なんてさっさと外でのたれ死んでしまえばいいのに」

誰かが言わずともそう聞こえてくるような雰囲気であった。

私は気分が悪くなったので急足で学校にたどり着くと、自分の席に座って俯いていた。クラスメイトは皆、昨日と同じように他愛のない話をしながら時間を潰しており、私は一人取り残されたようにそこに居続けるしかなかった。

暫く経つとチャイムが鳴り、担任の教師が入ってきた。

「みんな席についてくれ、今から朝の会を始めよう」

このクラスになってまだ三日程度しか経ってないがもう聞き慣れた声が耳に入ってくる。教師の声は良く通るため、クラスの喧騒の中であつてもはっきりと聞こえるのだ。私は憂鬱な気持ちのまま朝の会を聞くことになった。教師は連絡事項を伝えると最後にこう告げてきた。

「最後に、今日は適正検査がある、忘れている奴はいないと思うけど気を付けておけよ、じゃあこれで終わりにしようか」

そういうと教室を出て行ってしまった。

教室内は一斉にざわめきだす、そして教室の扉が開かれ、スーツ姿の男性たちが教室内へ入ってくる。恐らく政府の役人か退役した軍人だろうか、見た目だけでは判断はできないが。彼らは生徒達に一礼した後、教壇に立ち一通り生徒を見渡して口を開いた。

「君たちはこれから様々な訓練を受けることになるが決して浮かれることのないように、訓練は決して楽なものではありません、ですがその先にあるものは必ず貴方

たちの役に立つものです、我々はそのための協力は惜しみません、どうかその努力に恥じぬよう励んでください」

そういった後に退室していった。

その後直ぐに生徒達はそれぞれの荷物を持ち、体育館に移動を開始した。

私は体育館に行くために更衣室に移動する必要があった。着替えを終えた後でやっと体育館に到着したのだが既に大半の生徒が待機していて、私も列に加わることになる、暫くすると適正検査が開始されるようだ。適正検査は主に身体検査と空間把握、所謂直感能力と呼ばれるものを確認する試験を行うようだ。

先程説明があった通りに適正テストは厳しいもののようで私を含め何人かの者は緊張してしまっていた。適性のなかったものは残念がついているがそれでも落ち込むことはなく前向きになっている様子であった。

「次の方こちらに」

私の前に並んでいる生徒たちはそれぞれに返事をして順番に検査を受けていった。暫くした後私の番が来たため前に進み出る。私は検査担当の女性職員の方を見ると軽く挨拶をした。結果としては問題なく合格することができて一安心するこ

とができたが

「夢末さんはもう少し落ち着きというものを覚えるべきです」

と言われたことに對して少々ショックを受けた。それから数分後には検査が終り、適正の合ったものは後日詳しい資料が届くということなので、それまでは特にやることも無く暇になってしまふ。どうしたものかと悩んでいるうちに、今日の所は解散となったため帰り支度を始めたところ声を掛けられる。東雲さんが迎えに来てくれたのだ、彼女に話しかけると嬉しそうに

「ムソウちゃん一緒に帰ろ？」

という誘いを受けてしまった、正直なことを言うとは断る理由は無いので了承することにした、二人で停留場までの道を並んで歩いていたら東雲さんは何か言い辛そうにしているのか少し顔を伏せていたが突然決心した表情を見せ、こう言ってきた。

「……私ね、さっきの適正検査クリアしたんだけどね、本当なら凄く嬉

しいはずなのに何だかね、少しだけ、少しだけ怖いんだ。私、本当に大丈夫なのかになって、だから、その、えっと、ごめんなさい」

私は東雲さんの不安を取り除くべく、彼女の手を取りしっかりと目を見てこう言った。

「大丈夫だよ、きっと上手くいく。それにもし失敗したとしてもその時は私も何かできる事がないかやってみるから心配しないで？」

彼女はそれを聞いて驚いたような表情を見せた後、笑顔で「ありがとう！」と言ってきた。

いつものように私は自室で目が覚める。そしていつものように学校へ行く準備を始める。朝食を食べながらテレビをつけると、丁度ニュースをやっていた。

『昨日発生したテロリストによる襲撃事件により政府は防衛軍を派遣し、犯人グループを拘束しました』

「またテロかなあ」

と独り言を言いつつトーストを口に運ぶ。私は普段あまりニュース番組を見ることはないのだが、最近はこういった事件が多い気がする。テロの首謀者と思われる人物を逮捕したという情報が流れ、その翌日にテロが起きる。この繰り返しである。テロを起こすのは決まって外人で、目的は平等な権利とシェルターへの移住権を

求めているらしい。ただテロをしても意味が無いだろうと思っている。そもそもこの国は日本人以外を認めていないからだ。テロを起こしたところでそんなものが認められるはずもなく、むしろ悪化する可能性の方が高い。そもそもシェルター内で外人が暮らせたとしても扱いは変わらないだろうし差別が無くなるとも思えないのだが。まあ私が何を言っても無意味だろう。教室内の生徒達の大半はテロリストの話をしており、時折「あいつら馬鹿じゃねえの」とか「なんであんな奴らがシェルターに来れるんだよ」などと言った声が聞こえてくる。中には「テロなんて起きない方がいいに決まっているけど万が一の時は俺達がシェルターを守るぞ」と言っている者もいた。

ホームルームが始まる前に先生が教室に入ってきて話し始めた。

「席につけー、ホームルーム始めるぞ」

担任がやってきたため教室にいた生徒は自身の席へと戻っていく。

「そうだ、山先、後で連絡しとく事があるから職員室に……山先　？」

誰かが名前を呼ばれたようだが、返答がないため皆に笑われていた。それも当然であろう、なぜならその山先という人物は頭を机の上に伏して寝ているからである。

「おい、山先！早く起きないと遅刻にするぞ」

と言われてようやく目を覚ましたらしく慌てて立ち上がった。

「すみません、ちょっと眠くてボーっとしてました。」

「まったく、次からはしっかりしてくれよ？ほら、出席取るから席に着け」

「はい、分かりました。」

と言い自分の席に着いた。それから担任の教師が連絡事項を伝えていき、最後にこう告げた。

「そうだ、今日の午後からはパワードスーツの装着訓練があるから適正検査で合格判定を受けた奴は全員参加するように」

午後になり体育館に集合した私達は担当の教官を待っていた。しばらくすると教官と数名の教師がやってきた。

「よし、みんな集まったな。これからお前達に装着してもらおうパワードスーツについての説明をする。まずはこれを見てくれ」

と言って端末を操作すると私達の目の前に大きなスクリーンが現れた。

「パワードスーツの細かい名称は様々あるが、一纏めにギアと呼ぶことが多い」

「ギアは手足の延長のような役割を持つ物で、主に生身では扱えないような大型火器を扱うために開発、運用されている。またギアはスーツを着用しなければ操作することができない、この話の後でスーツは配布される。」

「次にスーツの機能だが、基本的には侵略者は体から鱗粉のように金属の粒子を目に見えて分かる形で放出しており、これを吸い込んでしまうと最悪死に至る。これを防ぐためにスーツは必ず着用しなければならん。」

「最後にギアの説明だが、基本的にギアの操作は操縦桿とフットペダル、この二つだが、これに加えてスーツを介して読み取った操縦者の脳波を読み取り操作を補助してくれる。だからといってそれに頼ることはおすすめでできない、初期型は完全な脳波操縦型だったが、動きが過敏だったり、僅かな恐怖心を読み取り動かなくなったりなどの事故が多発したために現行機は80%のリミッターが設定されている。しかしそれでも完全に制御できるわけではない、あくまでもサポート程度だと考えておいた方が良いでしょう。」

「以上だ、質問はあるか？……ないようだな、ではスーツに着替えた者から第三グラウンドに集まるように」

そう言い残すとその教官は去っていった。

スーツを受け取った私は更衣室へと向かう。

意外にもスーツは着心地が良く、多少の遊びがあり窮屈感もないものだった。

「……ちょっと、胸の辺りが苦しいような」

声のする方へ顔を向けると東雲さんがいた。なるほどあれだけ無駄に胸が肥えているからそうなるのだ、羨ましくはないぞ、全くもって無いとは言わないが、いや本当に。

その後他の男子生徒も集まり、いよいよグラウンドへと向かった。グラウンドに向かうと既に何人かの生徒が集まっていた。

「集まったな、これからギアを使って歩行訓練を始める。ギアの数はいくつか少ないから……二人、いや三人一組のグループを作ってくれ。」

言われた通りに生徒たちが動き始めた。私はというと最初東雲さんと後一人加えた三人で組もうと考えていたものの、そんな考えは甘かったと実感することになる。それは、既に東雲さんは私以外の人と組んでいたからである。周りを見渡すもほとんどが組み終わっており、残りは数人ほどしかない状況で途方に暮れていた。

ふとこちらに歩いてくる二人の男子生徒の姿があった。一人は逆立った髪型が特徴のヒビキ、後一人は。確か山先と言っていたような。そんなことを考えていると、ヒビキが私を見つけたようで小走りに駆け寄ってくる。

「無荘さーん、遅れたけど今から何が始まるんだ？」

「三人一組でグループを作って歩行訓練、聞いてなかったのかしら？」

「いやー、突然の尿意には勝てなくてさー」

ヒビキは周りをあらかた見渡した後、私の方を見る。その表情には明らかに何か企んでいることが丸わかりである

「それで、どうやら余っているのは僕達だけみたいだけど、どうする？」

そう言って手を差し伸べてくる。正直、ここで拒否すれば面倒事に巻き込まれるのは間違いないため仕方なく了承した。

「あー、自分も含めてですよね」

「もちろん、君を含めてだよ」

「分かりました、っと、自分は山先弘人。よろしくお願いします」

「ええ、よろしく頼むわ」

私含めた三人は自己紹介を済ませた後、教官にグループを作ったことを報告した後、ギアと起動キーを受け取りに向かった。

「僕、実物は初めて見たけど、意外と小さいな。」

確かに、私が受け取ったものは全高2m程だが、これはあくまで待機状態での大きさだ。起動すれば2.5m程の大きさになるらしい。

「まず最初に誰から乗る？ 自分は最後でも構わないですよ」

弘人が言う。私としても別に早く乗りたいわけでもないし、ここはヒビキを最初に乗せよう。ヒビキの方を見ると少し緊張している様子が見える。まあ無理も無いが、初めて使うものなのだから。

「まずは待機状態から主機を起動する。」

弘人が配布された資料を確認しながらヒビキに指示を出している。ヒビキは弘人に言われるまま、ギアに乗り込み、起動キーを差し込む。するとヒビキの目の前にホログラムの画面が表示される。

「次に左右のマニピレータームの操縦桿をしっかりと握り、自身の方に引くことで両脚のロックが解除される。後はギア自体を立たせればいい、オートバラン

サーがあるから派手な転倒の心配はないぞ」

ヒビキはゆっくりと立ち上がり、そのまま直立不動の姿勢をとる。

「お、おお……、すげえ　　！立ってる！」

「落ち着け、次に普通に歩くみたいに足を動かしてみろ」

ヒビキは右足を前に出し、左足を引きずるように動かす。

そして一歩踏み出す。

「うおっ!？」

バランスを崩し倒れそうになるところをなんとか踏ん張った。

その様子を見ていたクラスメイト達が笑い始める。

「気にするなよ、初めてでそこまでやれれば十分だ」

ヒビキはギアをさっきとは逆の手順で待機状態に戻していく。

「次は夢末さん、やってみてくれないか？」

「分かったわ」

ヒビキから起動キーを受け取ると先ほどと同じように操作、それから私、弘人と順調に進んで行く。そんな中

「ギャァ！」

一人の生徒がふざけてギアを操縦したためか、足を滑らせギアから転倒してしまった。幸い怪我は無かったようだが、この光景を見た周りの生徒からは嘲笑の聲が上がる。

「おいおい、大丈夫かよ」「ダサすぎじゃねえのあいつW」

ああいった物を見ていて気持ちいい物ではないな。

「それでは、全員揃ったところで歩行訓練を行う。最初はゆっくり歩くことから始め、徐々にスピードを上げてもらう。」

教官の指示で始まった歩行訓練は順調に進んだとは言えなかったが、それでも全員が何とか歩けるようになっていた。

「よし、今日のところはこれくらいにしておこうか。明日も行う予定だから遅れないように」

そう言い残し教官は去っていった。

全員が肩から息を吸うように呼吸をしている中、弘人だけは平然としていた。

「ひ、弘人は……、疲れてないのか……」

「？」

ヒビキがそう聞くと弘人はわざとらしく返答した。

「ただの痩せ我慢ですよ。本当は今すぐにでも座り込みたい気分です」

その言葉を聞いたヒビキは苦笑しながら言った。

「そっか、なら俺も頑張らないとな」

そして、歩行訓練開始日から六か月が経過したある日のこと、私はいつものように朝の身支度を済ませてからニュースを見ていると、どうやらスタジオが慌ただしくなっており、緊急速報としてアナウンサーが何かを伝えようとしていた。

『えー、たったいま入った情報によりますと、政府並びに防衛軍による緊急会見がたった今から始まるということです。』

テレビ画面に映された映像には政府の人間と思われる人物が映し出されていた。『国民の皆様、本日はこのような時間に集まっていたいただき誠に感謝しております。早速ですが、今回の要点だけを説明させていただきます。近々侵略者による大規模攻勢があり得る事が確認されました。これは過去類を見ない程の大規模なものです。ですが現状の人員では不足していると結論が出されました。そのため足りていない人員を補充するために学徒兵制度を導入することになりました。』

そこで一旦区切り、再び話し始める。

『現在、我が国の防衛軍は慢性的な人材不足に陥っており、このままでは近いうちに防衛ラインの維持すら困難になりかねません。そこで政府は防衛軍の人員確保の為、防衛高校の生徒を対象に徴兵制を実施することに決定しました。更に、成績優秀者を中心に来年度からは防衛軍への入隊を希望する者は防衛軍への入隊を許可することになりました。』

ここでまた一度切り、今度は別の人間が話し出した。

『続いて、現在の戦況についてご報告いたします。現在は防衛軍が善戦しているため侵攻速度こそ遅いものの、防衛ラインは徐々に後退しています。しかし、防衛軍だけではいずれ限界が来るでしょう。国民一人ひとりの協力が必要となります。どうかよろしくお願い致します。以上を持ちまして、政府からの発表を終了いたします。』

テレビの電源を切ると、ちょうどと言っているほどのタイミングで高校から電話がかかってきた。おそらくさっきのニュースと関係があるのだろう。

普遍的非日常 (3)

テレビの電源を切ると、ちようどと言っていいほどのタイミングで高校から電話がかかってきた。

やはりというべきか、先程のニュースを学校側も把握していたようで、今日からは教科を短縮し行うとのことだ。

登校すると、案の定クラス内は先程のニュースの話題で持ちきりだった。

「おい、聞いたか？とうとう俺たちにも召集がかかるらしいぜ」

「いやそれでも一年生の俺たちが召集なんてあり得ないだろ」

そんな会話を耳にしながらも私は自分の席に着く。

それからしばらく時間が経ち、授業が始まった。

「皆さんにお知らせすることがあります。もう既に知っている人もいるかもしれませんが、このたび防衛高校にて新たなカリキュラムが導入されることとなりました。あなたたち一年生は基本的には後方支援を担当してもらいます。」

担任の言葉にクラスメイト達はざわめき出す。

「先生！俺たちも最前線で戦うことになったりするんですか!？」

クラスメイトの一人の質問に対し、担任は少し考えた後、こう答えた。

「……………それはまだ分かりません。今は前線を下げながら防衛ラインの再構築を進めているらしいのですが、最悪、その防衛ラインすらも超えられた場合は……………」

その言葉に誰もが口を閉ざす。

「とにかく、まだ決まったわけではありませんから、しばらくは今まで通りの授業を行います。さあ、早く準備をしろなさい。」

しかし、現実とはそう甘くはないものである。前線は2ヶ月と数日後に崩壊し、生徒全員に対して召集命令が下されることになった。

教室には重苦しい空気が立ち込めており、誰一人として言葉を発しようとはしなかった。

それもそうだろう。自分達は入学して一年も経っておらず、知識も経験値もまるでない、付け焼き刃未満の状態で戦場に放り出されるのだ。不安になるなど言う方が無理がある。

私自身、自分がどのように行動するべきなのか分からず困惑している。恐らく他のみんなも同じ状況なのではないだろうか。結局、この日は誰も何も話すことはなく、解散となった。

明日から本格的に後方支援活動が始まるのだろうか？ 私は漠然とした思いを抱きながらも家路に着いた。

翌朝、起床してから身支度を済ませ、朝食を食べ終わるとすぐに学校からの通達が届いた。

どうやら、各種資材を前線基地へと運び出すための護衛として私達が召集されるようだ。

道中、ヒビキと合流した。

「なあ無荘、シェルターの外ってどんな感じかわかる？ 僕いまいぢわかんないんだよねえ」

「私に聞かれても……」

確かまだ座学では習っていない範囲だったかな、私は教本のデータを確認した。どうやらシェルターの外はシェルターに入ることのできなかった外人がテロリストと

して旧市街地などを不当に占拠し街を構築しているようだ。

「うーん、ようわからん」

「そんなんだから座学の成績が右肩下がりなんだぞ」

ヒビキを適当にあしらいつつも、教本の内容が本当なのだとしたら、私達はそのテロリストを果たして撃つことができるのだろうか。私はそんなことは今考えるべきではないと思うを切り替えて指定された集合場所へと向かった。集合場所には既に多くの生徒が集っており、各々雑談を交わしているようだった。

しばらくすると、担当の兵士が現れ、簡単な挨拶をした後に物資輸送に関する説明を話し始めた。

「えー、今回の物資輸送に関してだが、我々防衛軍は現在、後方での防衛線の構築と前線の立て直しを行っている最中である。従って君たちはこの場で護衛対象の車両を守り抜いてもらいたい。」

「何か問題が発生した場合には現場における責任者の指示に従ってもらう。では、早速だか装備の受け渡しを行う。少し型の古い物ではあるが最新の物と性能的な違いはさほどない」

濃い緑の強化スーツと防塵防毒使用のヘルメット、授業でも使ったことのあるギアの同型機に小銃が装備された物が一人一人に支給された。

ヒビキは強化スーツの着心地があまりよくないのか、ぴょんぴょんとその場で跳ねたり何らかの型を一通り行っているようだが、それでもしつくり来ないようで首を傾げている。

そんなヒビキを横目に私はギアの設定を変更しているが、どうも上手くいかずイライラを募らせていた。クソツタレ

私の苛立ちを感じ取ったのであろう、先ほどまで姿の見えなかった弘人が話しかけてきた。

「無荘、何やってるの？」

「いや、ちょっとUIが見辛くて……」

「ああ、そういうことか。それならあつしに任せてくれよ、こういうの得意だから」

「じゃあ、お願い」

それからしばらくすると設定が完了したようで、ようやく見やすくなった。

「ありがとう、助かった」

「いいよいいよ、それよりも、そろそろ出発の時間だから早く準備を終わらせないと」

「そうだね」

「ヒビキはちゃんと準備できたのか？お前のことだ、絶対に何かやらかしてる」

「大丈夫、多分、きっと、おそらく」

なんともアテにならない答えを聞きながらも私はギアを装着し、そしてそのまま私達計78名は物資を載せた装甲車と共に前線基地へと向かった。

初めて見たシエルターの外はあまりにも人の住める環境とは思えなかった、草木はなく赤土が剥き出しになっており、時折砂と金属の粒子が混じった風が吹く。道などは無くかろうじて人が通るための轍が残っている程度の代物でありその両脇には倒壊していないのが奇跡な程ボロボロになったビルが立ち並ぶ廃墟であった。シエルターの外はテロリスト達が独自に街を築いていると教本にはあったが、この終わった大地で人は果たして生きていけるのだろうか？と疑問を覚えたものの、私達はただ黙々と装甲車についていき物資の輸送を行った。

目的地の前線基地まであと半分といった所まで進んできていた。道中テロリストと遭遇しないため大半の人の気は完全に緩み切っていた。そんな中、ヒビキが声を上げた。

「無荘、あれ、なんだと思う？」

ヒビキは前方を指差していた。そこには比較的新しい人工物であると思える建造物があつた。

「うーん、なんだろう、多分アレじゃない？ ほら教本の」

「あー、テロリスト達の街の？」

「そう、そこら辺の廃墟に紛れ込んで生活してるとかじゃないかな？ 私達みたいな」

「なるほど、あり得るかも、とりあえず報告しておく？ 一応」

私は「うん、そうしよう」とだけ返事をした。しかし、特に問題は起こらず呆気なく前線基地に到着した。基地といってもテントやコンテナのような簡易的な建物が立ち並んでいるだけで、とても前線基地と呼べるようなものではなかった。

「よし、君たちご苦労だった。物資の搬入が終わり次第シェルターへ帰還してもら

う。それまで各自待機するように」

そう言い残し補給班の人は去っていった。

私達は物資を降ろした後、護衛班を交代して帰路に着くことになった。しかしいざ帰還という時に砂嵐が発生したため帰りは行きよりも時間がかかるらしい。

私はそんな不運に見舞われた帰りの護衛班に手を合わせつつも装甲車内でヒビキと先程見た不自然な人工物について話していた。

「ねえ、無荘、あの街ってやつぱりおかしいよね」

「確かに、あんな街で人はどうやって生活しているんだろう」

「それに、テロリスト達も全然襲ってこなかったね。普通もったこう、なんていうかピリピリした空気があるはずなのにさ」

「言われてみればそんな感じもするけど、でも私達に敵意を向ける理由もないから気にする必要も無いんじゃないかな」

「そうかな？それよりも早く帰って風呂に入りたい」

「同感だわ」

そんな時だった、前方から爆発音が聞こえたと思えば、すぐに悲鳴と怒号が響き

渡った。

「敵襲！全員戦闘態勢には……」

装甲車のドアを開けて外にいた護衛班の1人が叫ぶ。

私は同時にギアを纏い、小銃の安全装置を解除した。

ヒビキは何が起きたのかわからないままギアを装着しようとしているが上手くいつていないようだ。私がヒビキに駆け寄り、手伝おうとしたその時、再び爆音と銃声が響いた。それと同時に私たちの乗っていた装甲車が吹き飛ばされる。

私は運良くドアから吹き飛ばされたが、ヒビキだけは装甲車ごと吹き飛ばされた。私は慌ててヒビキの元へと駆けつける。幸いにもヒビキの怪我は大したことは無いようだったが意識を失っている。私はヒビキを背負うと急いでその場から離れた。しばらく走ると敵の姿が見えた。最初はテロリストの襲撃かと思っていた、でも、私はこの護衛任務で少し期待していたのかもしれない。こんな荒廃した世界を作った原因の『侵略者』に会えることを。

侵略者「コマンド」それは人類の敵。

侵略者は突如として現れ人類に対して攻撃を仕掛けてきた。

侵略者の外見は様々だが、共通していることがいくつかある。まず、その全てが生物ではなく金属で形取られた生物あること。次に、その全てが強力な兵器を所持すること。そして、最も特徴的なのは無機物を侵食し同化することだ。

小型のコマンドは私達を見つけるとすぐさま襲いかかってきた。

私はヒビキを地面に寝かせると、小銃を構えた。

「ヒビキ、気絶してるだけなら早く起きてよ」

ヒビキは私の言葉に反応しない。

私はヒビキに呼びかけながら敵を撃つ。しかし、一向に当たる気配はない。それともそうだ、私は射撃がどうも苦手なようで、ギアのアシストがあっても50m離れた窓に掠りもしないのだ。

私はヒビキを庇いつつ小銃を撃ち続けるが当たらない、予備の弾はヒビキの分も含めて150発、しかし無情にも弾切れを起こす。ギアの装備はサブアームであるナイフが一本、これだけだ。

「クソッ、こんなのでどうしろと」

私の焦燥を嘲笑うかの如く、敵はこちらに向かってくる。私は神を信仰している

わけではないが、神が遂に私を収獲しに来たかと考えた、がどうやら神は私のことが嫌いらしい。

「無莊、ヒビキは大丈夫なのか!？」

小型のコマンドを後ろからグレネードで吹き飛ばし豪快に弘人はやってきた。

「ヒビキは無事、だけどヒビキを庇いながら戦うには厳しいかも」

「わかった、ここは俺に任せろ、無莊はヒビキを連れて逃げてくれ」

「でも、他の皆んなは」

「……し、分からん、でも殆どが逃げている。一応後方の部隊に連絡はし

た、この位置まで全力で逃げろ。そうすれば助けが来るはずだ」

弘人から座標データが送られてきた。ギアの全力で走れば10分も掛からないだろう。

「殿は任せてささっと行け！」

私はヒビキを抱えて、全速力で逃げる。

後ろでは爆発音が響く、しかし弘人が撃ち漏らした一部が私達へ向かってくる。

「くそっ、しつこい!!」

私はそう叫びながらも走り続けた。

「ここまで来れば安心かな？」

あれから10分ほど走っただろうか、後方の部隊が回収にやってくる場所の付近までやってこれた。人の気配は感じられるがそれらしい人物らは見当たらない。

集合地点を間違えたのかと考えたが、そんなはずは無いと思いたい。

すると突然、目の前に何かが落下してきた。正確にはギアを着た人が。

その人物はゆっくりながらも立ち上がると私達に近づいてくる。私は驚きつつもヒビキを守るように立ち塞ぐ。

「ま、待って待って無荘！私！唯！東雲唯だから！ほら！同じクラスの東雲唯だよ！！覚えてない？私達友達だったじゃん！！！」

唯は必死に訴えかけてくる。

「え、あ、うん。ごめんなさい、人違いです」

「そんなあゝ」

唯はその場に崩れ落ちた。

「嘘だよ、忘れるわけないでしょ」

私がそういうと彼女は顔を上げ笑顔になった。

「よかったー忘れられたかと思っただよお」

唯は涙目になりながら抱きついてきた。

「ちょ、ちょっと離れてくれないかな、恥ずかしい」

「あつ、ゴメンね」

「いや別にいいけども。ところで、さっきはなんで落ちてきたの？まさかとは思
うんだけど、あの小型のコマンドに追いかけられてたりとかじゃないよね」

「……いや、ちょっと辺りを見渡そうと廃ビルの屋上まで壁登りしてた
らうっかり落ちちゃって」

唯は照れ笑いを浮かべて頭を掻いた。

「いやいやいや、普通は登らないでしょ」

「いや、だって、なんか高いところに行きたくなって」

「いやまあいいけどさ。それより早くここから離れよう、まだ小型コマンドが
いるかもしれないし」

「そうだね、じゃあさっさと行こうか」

私達はその場を離れようとした。

「おい、お前たちそこで何をしている」

背後から声をかけられ振り向くとそこには防衛軍の兵士が立っていた。

私達は兵士に事情などを説明し、回収して貰おうしたが

「ふむ……事情は把握したが、今はシェルターに戻ることができないんだ。

すまないな、恐らく君たちはここの防衛に回されるだろうな」

「どういうことですか？」

「実は今、シェルターは侵略者とテロリストどもの襲撃を受けていて、帰還することが出来ない状況なんだ。申し訳ないが、シェルターに向かうことは諦めてくれな
いか？」

「そんな、どうにかならないんですか!？」

私は思わず詰め寄ってしまった。すると、唯が私の肩を掴み引き離された。

「まあまあ落ち着きなって無荘、とりあえず安全な場所まで移動しよう。ね？」

私は冷静さを欠いていたようだ。

「す、すみません、取り乱しました」

「いや、構わない。我々もこんな事態になるとは思っていなかったのだ。だが、これは現実だ。受け入れなければならぬ。我々はここで侵略者を迎え撃つしかない。そしてこの作戦が終われば、シェルターに戻るはずだ。それまでの辛抱だよ」

「分かりました。ありがとうございます。それで私たちはどうすれば？」

「少し待っていてくれ、確認してくる」

そう言うとは彼は何処かに電話をかけ始めた。

「ああ俺だ、補給部隊の生存者を、……何　　？　　まで！　おい！　クソッ！　妨害か！」

「どう、したんだろう」

「分からない、でもあまり良い感じではないみたいだけど」

すると後ろから別の兵士が血相を変えて走ってきた。

「報告します！　シェルター守備部隊がテロリストの襲撃により陥落寸前とのこと！　救援要請も出ています！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私達は言葉を失った。そんな時だった、地面から若干の揺れを感じる。

「な、何？地震？」

「違う、と思う。多分、侵略者が近づいてきているんじゃない」

そう言った途端に空に大きな穴が開きそこから巨大なコマンドの頭部が覗いた。その大きさは頭部だけでも20メートルはあるだろう。

「おいっ！早くこっちへこい！！」

兵士がそう叫び、手招きをしているが私の足は動かなかった。いや、正確には動けなかった。恐怖で身体が動かないのだ。

その時、私はヒビキを抱き抱えたまま座り込んでしまった。

（ああ、ダメだ私）

私達がそうこうしている間にもコマンドはこちらに向かってきていた。もうすぐそこにまで迫っている。

「おい！！早く来い！！」

そんな私を見かねてか兵士の1人がコマンドと比例すると豆鉄砲のような小銃を撃ち続けている。だがコマンドには大して効いていないように見える。するとコ

マンドは細かく身を震わせると同時に地中から這い出して姿を現す。その様子はまるでトンネルを作るためのドリルが芋虫になったかのような姿をしていた。その姿はまさしく怪物である。

その怪物を一言で表すなら、『超巨大ワーム』であろう。

その化け物は口の中にある鋭利そうな牙を回転させながら突進してきた。それは一瞬の出来事だったが、ゆっくりと時間が流れているような感覚に襲われた。そして、気がついた時には目の前にまで近づき、

そして――。

——ドンっという音と痛みと共に私は目を覚ました。

その痛み自体はなかった。ただ、それと同時に全身に強い痛みが走る

『おい！この野郎まだ生きてやがる！』

恐らく私を蹴ったであろう人物が私の付けていたヘルメットを外す、口の中にジャリジャリとした感触が不味い空気と共にやってくる。

「ゲホッゴホッ。・・・うぐっ！」

『お、お前ら！そいつも殺せ！殺しちまえ!!』

誰かに何か命令を出した男は興奮しているのか息遣いが荒い。他の奴らも同様に、いやそれ以上に息が上がっている。見た感じシエルターの人間には見えない、恐らくコイツらが教本にもあったテロリストどもなのだろうか。私は起き上がろうとするが体が上手く動いてくれない。それに何故か体中が非常に痛む。

それでもなんとか立ち上がって逃げようとするが、体に力が入らないためうまく立てない。

それどころか視界すらぼやっとしていてよく見えなくなっている。

すると突然誰かに髪を掴まれそのまま体を持ち上げられる。

『お前たちのせいで俺たちはこんな惨めな………！　なんで惨めな生活を送らなきゃ行けないんだ！』

私の頭を掴んでいる男は怒りに任せて私の顔を地面に叩きつける、目の前が白く
なると共に鼻を中心に熱と痛みが走る

痛い

熱い

痛い

熱い

何度か叩きつけられたのち、疲れたのか手を離される。

そして、顔を掴まれ無理矢理立たされ、今度は壁に押し付けられる。

「・・・・・・・・！！、！！・・・・・・・・」

声が出ない。

すると男の手が私の首元へと伸びてくる。

さっきの叩きつけの影響か頭に血が集まり思考が回復してきたのか私は咄嗟に男の鳩尾に膝蹴りを食らわせようと試みるが避けられてしまう。しかし、避けたことにより体制が崩れたためチャンスだと思い、もう片方の足で壁を蹴り頭突きを食らわせ拘束から逃れる。

周りの男達は何事かを呟いているようであったが、何を言っているかまでは聞き取れなかった。しかし何かしらの言語のようなものであることだけは分かった。

男達は懷から各々武器を取り出すと一斉に襲いかかって来た。

私はそれを必死になって避けるものの所々掠り傷が出来ていく。幸い致命傷を負ってはいないようだがこのままではいずれ捕まるかもしれないと思った矢先で

あつた。

ヒュンッと風を切る音が聞こえたかと思うと男達が次々と倒れていく。突然のことに呆気にと取られていたが、すぐさま思考を切り替えヒビキや唯が周りに居ないか激痛を引きずりながらも探し始める。どうもあの2人の姿はないらしい、だとすれば逃げたということなのだろうか。とりあえず今はここから逃げるのが最優先事項だと考え体に鞭を打ちシェルターに向かって体を引きずる。

一步一步の歩みが遅いせいなのかなかなか進まない、それが更に焦燥を募らせる。ようやく瓦礫の山の一つ分進んだ辺りだろうか、不自然に倒れている人影のような物を見つけたのは。人間というものは恐ろしいものほど確認して安心したがる性があるが、こういう場面のことをいうのだろう。そうであってほしくないと思いつつも恐る恐ると近づいてみる。

そこには見覚えのある顔があつた。

「・・・・・・ねえ、唯・・・・！ねえしっかりしなさいよ!!」

声を掛けても返事がない。体を揺らしても芯がないかのようにユラユラと揺れ動くだけである。何度も名前を呼ぶうちに段々と涙が出てきた。今までの人生で一番

泣いた気がした。泣き喚いても何も変わらないことは分かっていたが止めることは出来なかった。

どれくらい経った頃だったろうか、私は唯だったものを背負い再びシェルターを目指し始めた。

無茶無謀と言われても咎める者はここには誰もいないのだ。だからといって死ぬつもりなど毛頭ない。

ただひたすら前へ歩く。途中何人かの死体があったが無視をして進む。死体を見る度に吐きそうになる気持ちを抑え込みとにかく歩いた。しばらく歩いているとまた人影が見えくると同時にどこからか声が聞こえてくる。

「やあ、おはよう、こんにちは、こんばんは」

フード付きの丈の長いコートを着た人物だった。フードを深々と被っているため顔の輪郭すらわからない。それどころか、何も感じない。殺気や生気と言った生物が持ち合わせているはずの気を、アレはそれら一切を発していない。それどころか生きているという感じが全くしない。アレは人形かマネキンといった方が納得できるほどだ。

「少し驚かないで聞いてほしい。君が背負っているそれを降ろして欲しいんだ。それを持って帰られると少々厄介なことになるんでね」

「嫌だ、って言ったらどうするの」

そう問いかけるとどこからか聞こえる声は一瞬唸り声を上げると、よしわかったという言葉が返ってきた。

「少々予定にはなかったが、ここに降ろして行く荷物が二つに増えるだけだ」

その言葉が言い終わるや否や目の前のマネキン野郎が何かを抜刀する構えを取ると姿が消える。

私は咄嗟に後ろに飛ぶが全身に鈍い痛みが走る。

何かとてつもなく大きな物体で横殴りされたようだった。例えるなら冷蔵庫のような物で殴られたような感覚に近い。あまりの衝撃に体が動かない。

何とか視線だけを動かしさっきのマネキン野郎を探すが、既にその姿はなかった。

あと一回でも直撃をもらえば恐らく私の体は耐えきれないだろう。

あまりにも脆い自信の体を恨みつつも思考を巡らせる。あれを食らわないにはどうすればいいか。

防御は駄目、回避？あんなに速いものを躲せと？

攻撃して相殺？武器も無しにどうしろと。

考えている間にもどんと相手が距離を縮めてくるような錯覚に陥る。

どうしようもない絶望感が私を襲う。

もう諦めてしまおうかと思ったその時、ふとある考えが浮かぶ。あまりにも突拍子もなく大博打で馬鹿馬鹿しい方法だ。だけど、もし、もし仮にこの考えが上手くいったとしたら、生きて帰れるのだとしたら。

私は一か八かに賭けることにした。

最初の一発を食らった時、なぜか追撃を行わなかった。根拠はないが、もしかすると相手の武器はその大きさが故に武器自身に振り回されているのではないのだろうか。ならば、一撃目さえなんとかすれば相手に一撃ぐらいは与えられるだろう。そんなことを考えているといつの間にか相手はすぐそばまで来ていた。

全ての動きがやけにゆっくりに見える。まるでスローモーションのようにゆっくりと。

全身の関節が錆びついたかのようにゆっくりとしか動かない。

回避か

防御か

否、あえて受け止める。

私は覚悟を決め、目を瞑り、歯を食いしばり、両手を広げて、奴の攻撃を待った。そして、地面に叩きつけられた衝撃が体中を駆け巡り意識が飛びかける。それでも掴んだそれを決して離さない。

「驚いた、まさかこんな所にブレイカー保有者がいるとは。それも適合者のオマケ付きで。」

やがて視界は真っ赤に染まっていく、口の中には血の味が広がっていく。全身が金属のように冷たくなる感覚と共に徐々に自分の体温が失われていく。このまま自分死んでしまうのだろうか。

だがまだだ。これではまだ死ぬ訳にはいかない。

薄れゆく意識の中、必死の思いで手を動かし握っていたものを引き抜くとそのままソレを突き立てる。

それは、ただの錆び付いた鉄パイプだった。

それを一思いに突き立てる、しかしその触感を確かめる間もなく私は、私でなくなつた。

「うっ……おえっ……げえ」

それは最悪の寝起きだった、名前を知っている誰かと親しく喋っていた何か。何も出来ずに衝動に駆られる何か。

それを思い出そうとすると頭が痛み、猛烈な吐き気と喉の渴きに襲われる。

そんなことを数十回と繰り返しているうちに、何を思い出そうとしていたのか忘れていく。

「(……明日は、何するんだっけ　?)」

頭を冷やすために洗面台に移動する、不意に鏡に写った自身の顔の酷さに思わず苦笑いを浮かべる。

鏡に写る自分の体に浮かぶ斑点模様、それらが朝日を反射し、自らを主張するかのように銀色に輝いていた。

行くぞ我ら独立遊撃小隊プロトン（1）

あの日、私は気づけば病院のベッドの上で目覚めた。

私はあの後シエルター近くで倒れていたのを弘人に発見され保護されたらしい。弘人の話では、私が発見された時は酷い怪我、なんでももので言い表せたものではなかったらしい。それでも生きていたようで、弘人は奇跡だと言って喜んでくれた。「（・・・また夢か、最近多いな。それに、前よりはつきりしているような気がするようなしないような？）」

あの時の記憶はほとんどが抜け落ちているが所々記憶は残っている。しかし、それらはどれも現実離れしており、まるで小説や映画のような出来事だった。正直、今更ながら信じられないような話だと思っているが、私は何故かそれが事実なのだと確信してしまえるのだ。

私はあの時に確かに一度死んだ。そして再び蘇った。

恐らく原因はこの身体にできた斑点模様、医者が言うには汚染された大気を吸うと、その大気に混じった金属が身体を文字通り蝕み、身体の表面に浮き出てくる病

気「メタロシス」

医者が言うには一種の風土病の様なものらしい。

でも、それとは根本的に何かが違う。蝕むというには不自然に感じる。まるで"足りない部位を補うかの様に、斑点が現れているように見えるからだ。

私はあれ以来ずっとこの病室で過ごしている。

弘人とヒビキは毎日お見舞いに来てくれるが、唯はあれから一度も会いに来てくれない。連絡をしようにも唯の携帯には繋がらない、何となく察している自分がいるのを否定できない。

目が覚めてから数日後、私は弘人とヒビキに気になっていた事を尋ねた。

「あの日あの後何が起ったの」と。

私が意識を失ったあと、二人はどうなったのかと。

ヒビキは口をムニョムニョパクパクと動かし、身振り手振りしているが一言も発することはなく、代わりに弘人が説明を始めた。

「……俺達はあの日、俺達を除くほぼ全員が戦死した。俺と一部俺に付いてきた奴らは前線基地まで逃げる事が出来たから助かったけど、シエルターまで

逃げようとした連中はみんな……東雲もだ」

唯が死んだ。

私は一瞬言葉の意味を理解することが出来なかった。いや理解はしたのだろう、ただ心はそれを受け入れられず拒絶している。

頭ではわかってはいる筈なのに涙が頬を伝い止まってくれない。

私にとって唯は防衛校で初めて出来た友達だった。だからかな、こんなに悲しい気持ちになったのは。

「……東雲は……最期まで戦ってたと思う、いや違う、いた。」

弘人のその言葉に私は何も答えられなかった。いや答えなかったのかもしれない。どちらにせよ私はその時の光景を見ていない、見ることが出来ない。

「それから俺は必死になって生き残った人を探して回った。ヒビキは運良く瓦礫と、……の間に埋もれていた所をほぼ無傷で発見して何とか助けることができた。それから生きている奴らで他の生存者を探して回ったが見つからずじまいだったよ。それで最後はお前を見つけた訳だ」

弘人が何を言おうとしているのか、私が何を聞きたいのかを理解した上であえて

避けているようだった。私もそれを感じ取りこれ以上追及することはしなかった。ただ、ただ最後に、

「ごめんね」

それだけを告げた。

「気にすんな。お互い生きてたんだ、また会えただけで十分、だろ」

私は、そう言って笑う彼に、どんな顔を返していたのだろうか？ それすらもう覚えてはいない。

私の日常が再び動き始めたのは退院してから2ヶ月程経ってからの事だった。

最初はまだ体が本調子ではないと入院生活を余儀なくされたが今では普通に学校に通えている。

それでも唯を、他のクラスメイトを救えず生き残った罪悪感は枷として残ったまままだ。

教室を見渡すがやはり人数が少ない、前は生徒が25人弱ほどいた教室は今では10人もいない。

殆どが戦死したのだからしょうがない、などとほざけられるほど腐ってはいな

い。程なくして、クラスが統合されることになった。

クラスが統合されてしばらく経ったある日を境に、一部のクラスメイトの私を露骨に避けて、見る目がまるで汚物をみるようなものに変わっていく。恐らく原因はこの斑点模様だろうか、どこからか私がメタロシスを発症した事が広まったのかもしれない。

医者にも言われた事だがこの病気は人に伝染するものではないのだが、どうにもそういう風に捉えている者が多い。感染するものだとも思われているのだろうか。

しかしどんどんその空気は感染していく、次第に私に対する扱いはエスカレーターしていき、やがてそれは虐めにまで発展した。

机の上に置かれた花瓶、落書きだらけの壁、椅子には画鋲、極めつけはトイレでの暴行。

私はそれに対してついカッとなってしまう、反撃すると相手がさらにヒートアップしてしまい余計酷くなっていく。

「いい加減にして」

と言ってみたが効果はなかった。むしろ逆効果だったようで、次の日から暴力行為が露骨に増えていった。

そんな日々が一月ほど続いたある放課後、私はついに我慢の限界を迎えてしまった。

私は弘人やヒビキに何も言わずに学校を辞めることにした。正確に言えば飛び級制度を利用して軍に志願し、そのまま軍人になった。

軍に入ればあの環境から抜け出せて、胸に残る罪悪感を少しでも和らげることが出来ると思ったからだ。軍人になってから半年が過ぎた。私は毎日訓練を続けてはいるものの未だに戦闘に参加させてもらえない。大した理由がある訳じゃなかった、ただ単純に私は集団と言うものが怖くなっただけだ。内心何を考えているのかわからない他者が己の快樂の為だけに利害の一致した他者と結託して他者を蹴落とす世界。私はそんな世界に上手く馴染めなくなった。それだけだった。軍に入れば変わるなんて思っていた、努力もした、その結果がこれならいっそ腐り切ってしまえばよかった。そうして私は何もかも投げ出して自堕落に生きようと思い始めた時だった、メタロシスが悪化した。

全身を銀色の斑模様が覆い尽くそうと侵食してくる、痛みなどは一切ないが、侵食された部分の感覚が鈍い。とても大きな瘡蓋の様にも見えるそれに私は恐怖を覚えた。剥がそうにも傷一筋たりとも入らないそれを毎晩かきむしる日々、搔き過ぎて指先の皮は捲れ、爪は欠けた。そんなある日上層部から直々の命令が私に下った。どうも私を今所属している隊から移籍させ、別の部隊に移籍させると言うものだ。恐らく体のいい厄介払いだろう。私だってこんな状態でなければ拒否してはいた。しかし私にとって渡りに船でもあった。

私はその命令を受け入れた、そして翌日から新たな配属先での生活が始まろうとしていた。

「独立遊撃小隊プロトン」聞いたことも無い部隊名だ。一応所属するからには挨拶はしっかりとしなければと思い、隊員が待機するという部屋に足を踏み入れた。事前に聞いた話ではプロトン小隊は少数精鋭の試験兵装の実戦運用できるレベルまで性能を高めるための小隊らしいが。中に入るとそこにいた人員は私を除くとたった二人だけだった。

少数精鋭とは聞いていたが、これは何かの悪戯なのだろうか。

「えっと、今日付けで配属になりました。夢未無莊中尉です。」

そう言いつつ敬礼をする。相手はこちらを見てはいなかった。

仕方ないので相手の観察を始める。

一人は私よりも少し背の高い、スキンヘッドでニヤニヤと怪しい笑みを浮かべる男性。もう一人は私よりも少し背の低い長い黒髪を後ろで束ねた美人といっても差し違い無い女性、しかし後者はどちらかと言えば広報部なんかにいそうな女性という印象を受けた。どちらも軍人とは思えない程ラフな格好をしている。私の場合は入隊時からずっと来ている制服を着崩していいだけなのだが。

私が観察していたのに気づいたのかスキンヘッドの男性が私に話しかけてきた。「やあやあやあよく来たね。僕のこととは知らないと思うが別に知ったところで糧にならないからね、一部省略して自己紹介しよう。」

「僕は村里彰、こんな所で燻っている研究者さ。こっちは助手の天川小春君。」

「初めまして、よろしくお願いします。」

彼女はペコリとお辞儀をした。

「それで君はどうしてここに？ここは僕たちみたいな落ちこぼれが居る場所だよ。」

何となく察してきた。体のいい厄介払いなどと思っていたが、本当に厄介払いだったようだ。

「いえ、なんでもありません。私は今日からここでお世話になるので、ご迷惑をおかけしないように頑張ります。」

「ああそう、頑張ってくれたまえ。それじゃあ早速君の装備を見に行こうか。付いてきたまえ。」

彼は私の返答に一切の感情を表さず、私を武器保管庫へと案内した。しかし、そこは武器保管庫と言うにはあまりにも手入れがされていなかった。殆どがシートで覆われており、一部のシートには蜘蛛の巣が塊として張り付いていたりもした。

「ようこそ、僕の夢の跡地に。歓迎はしない」

「あの、ここは？」

「見ての通りだが？何か問題でも？」

「いえ、そう言うわけでは」

「そうかい。」

彼の表情は冷たかった。

「ここにある物は大半が失敗作、または上から押し付けられた欠陥品ばかりサ。僕が作り出した物もあれば、スポンサーから提供されたものもある。大半は破棄する予定なんだが、この有様だ。」

彼が指差す先には大量の銃火器があった。しかしどれもこれも使い物にならなさそうさ。

「この中からキミが使えるような物をいくつか見つけてもらう、僕も暇じゃないからね。」

私は彼に言われた通り適当に銃器を漁った。どれもこれもともに整備されていない旧式の物ばかりだ。中には錆び付いたマシンガンもあった。しかし、その中で一つだけ異彩を放つものがあった。

槍だ。銃火器の中に何故か槍が混ざっている。

それもハルバードと呼ばれる斧のような刃のついた槍だ。

「それは試作品の失敗作の一つでね、何を考えたのやら、銃火器の効かない奴に槍を持って突撃したら倒せたという報告から試作で一本作ったらいいんだ、まあ見た目以上に重いからあまりオススメは出来ないヨ。」

いつの間にか背後にいた村里さんが私に語りかける。私はその槍を手に取り、軽く振り回したり構えてみたりした。確かに重量はあるが、扱いにくいほどではない。むしろ今まで使っていた銃火器より手に馴染む感じがする。

私はこの槍が気に入った。

「決めたよ、私はこれを貰うことにする。」

「そう、それを気に入ってくれて良かった。」

村里さんの表情は相変わらず冷たいままだった。

「それと、そこで見てるのは誰かな。」

村里さんの視線が武器庫入り口に向けられる。

「ははは……バれますよね。一郎ですよ彰さん。」

入り口にいたのは私よりも背が高いが何だかイマイチパツとしないボサボサ頭の男だった。村里さんに対して親しげに話しかけているところからすると彼も関係者なのだろう。

「やあ、一郎くん。今新入りの武器を見繕っていた所サ。」

「こんにちは、夢未無莊中尉。自分は天川総一郎、君の資料は一通り見させても

らったよ。よろしくね。」

「よろしくお願いします。」

天川と名乗った男は私に手を差し出した。握手を求めているのだとすぐに分かったので私もそれに応じる。

「一郎くんは一応この小隊ではオペレーターをやっているんだけど、あんまり戦闘には参加できなくてね、いつもサポートに徹してるんだ。」

「はははははっ、彼女が戦闘要員だからネ、彼の出番は無いに等しいんだよ。」

村里さんは心底おかしそうに笑った。

「あの、失礼だと思いますが、天川総一郎さんは天川小春さんと何か関係があったりしますか？苗字が同じなので。」

「あー、うん。自分の姉だよ。」

イマイチパツとしない総一郎さんと小春さんを比べても姉弟には見えない。そもそも年齢が離れすぎている。

「姉弟って言っても義理だけだね。血は繋がってないけど。」

「義理の姉弟ですか。」

「そういうこと。」

総一郎さんがそう言った時、どこからか私の足元に赤い線が飛んでくる。まるでレーザーポインタのような線だ。

「おやおや、これはまた熱烈な歓迎だね。」

村里さんがそう言うのと私の足下の線は消えてしまった。

次の瞬間先ほどまでレーザーポインタが当たっていた箇所小さい杭のような物が突き刺さっていた。

「それ以上いっちゃんに近づけば、当てる。」

入り口からは軍靴の足音が聞こえる。私は声の主を見た。

そこに居たのは天川小春だった。

「いやあ、流石にこの年になってゝいっちゃんゝはないと思うよ。」

総一郎さんが苦笑いを浮かべながら呟く。

「そんなことはどうでもいいの。それよりなんでこんな所に来ちゃったの、いっちゃんは何もしなくていいのに。必要な物があればお姉ちゃんに頼めば持っていてあげたのに。」

彼女はまるで子供のように頬を膨らませていた。

「そうはいかないよ、キミも知っているように僕はもう軍人なんだから。」

「そう言うところが心配だって言うの！それにいっちゃんが戦わなくても私が全部終わらせれば良い話だし。」

「それじゃダメなんだ。僕が戦う理由はそこにあるから。」

「でも！」

話が長くてたまったものじゃないなと思うながらハルバードを持ち上げる、流石にギアのパワーアシストがないと振り回そうとすればむしろこちらが重量に身体を持っていかれそうだ。

「大丈夫だから、約束する。」

「絶対だからね。破ったら許さないから。」

「分かってる。」

二人はそのまま見詰め合う。まるで映画のワンシーンみたいで正直キモい、頼むからよそでやってくれ。

「はい、そこまで。二人ともイチャつくのは帰ってからにしてネ。」

村里さんが二人の間に割って入る。

「イチャイチャなんてしてません。」

「そうだよ、彰さん。」

「ハイハイ、とりあえずキミ達も武器を選びに来たんだろう。早くしないと日が暮れてしまうヨ。」

「……ああ　　！そうだった、そうじゃなくて。」

総一郎さんは思い出したかの様に脇に抱えていた茶封筒から紙を取り出し、読み上げた。

「独立遊撃小隊プロトンへ通達、2日後明朝よりシエルター郊外において観測された正体不明の構造物の調査を開始する。調査隊はこちらから選抜された7名とプロトン小隊計10名で編成する。尚、本作戦における全指揮権は大尉である中村美香大尉が有することとする。以上。」

「それはまた急な話で。」

「まあ、この手の任務は大概が急に決まるものだからネ。」

村里さんはそう言いつつ肩をすくめた。

「あの、ところでこの任務は私も参加するんですか？」

私は恐る恐る質問をする。

「勿論だヨ。よかったじゃ無いか早速お披露目会だ。」

村里さんはニヤリと笑った。私は自身の口角が下がっていくのを感じた。

M e t a l B r e a k e r

著者 山田太郎＝焼肉 NT

発行日 2023 年 3 月 15 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/187441/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
